文字・表記（史的研究）

松井利彦

前置きは省略して、早速この二年間に発表された当該分野に関係のある研究、またはそのための調査報告と認められる論文・著書（既発表の論文集も対象にする）を紹介し、研究の動向を見ていくことにする。

一

漢字を論じた著書に、1中田祝夫『日本の漢字』（「日本語の世界4」、中央公論社、昭57・6）、2藤堂明保『漢字の過去と未来』（岩波書店、昭和57・9）があった。1では〈漢字は日本人にとって文字そのものであって、普通の場合は、わざわざ「漢字」といわないところの、ごく微妙、軽微な意識が、漢字を日本の文字と化し、やがて古代以来の漢字の日本的用法が発達した。その日本的用法の例は数において厖大であり、質において濃度の高いものであった〉として、漢字の日本的特殊用法の興味深い種々相が論述されている。その点で半分以上が中国側の記述に割かれている2と異なる。2は未来の部、すなわち漢字政策に特色がある。

字形・字体に関するものでは、3伊藤新一「山ノ上碑の刻書――古代中国書法の継承――」（『武蔵野女子大学紀要』17、昭57・3）、4井上秀雄「埼玉稲荷山古墳出土鉄剣の金象嵌銘文の字形に関する一考察」（『日本文化研究所研究報告』19、昭58・3）、5蔵中進「上代則天文字考」（伊藤博・井手至編『小島憲之博士古稀記念論文集古典学藻』所収、塙書房、昭57・11）、6遠藤嘉基『日本霊異記訓釈攷』（和泉書院、昭57・5）、7エツコ・オバタ・ライマン「『節用集』における国字（日本製漢字）」（『モラロジー研究』、昭58・4）、8山崎福之「類聚古集の本文と書入」（『国語国文』51―3、昭57・3）、9小林芳規「寛平法皇の訓点」（『国語と国文学』59―3、昭57・3）、10林巨樹「字体の歴史」（『講座日本語学』6所収、明治書院、昭57・5）、11浜田啓介「出版と文字の歴史」（『講座日本語学』6所収）があった。6には、「『省文』をめぐって――〈日本霊異記〉を中心に――」「『日本霊異記』と異体字」〉などの論考が納められている。8は「宍」と「完」の字体について詳細に検討したもの。10は出版されることによって節用集の漢字字体が正体を基調とする方向に進んだこと、また平仮名字体が仮名草紙から草双紙になるにつれて収斂し合理化されて記号化が進んで活字に近くなったことなど、興味深い問題が展開されている。

漢字と和語との対応、所与の漢字の訓法などを対象にした論文には『古事記』『万葉集』に関するものを中心に次のごとく数が多い。

12小林芳規「漢文の古訓点から観た古事記の訓読」（下）――本文の訓み方――（『文学』50―1、昭57・1）、13同「古事記訓点史」（竹岡正夫編『国語学史論叢』所収、和泉書院、昭57・9）、14『古事記』（日本思想大系1、岩波書店、昭57・2）、15工藤力男「安万侶の方法と古事記の訓読」（『国語国文』52―5、昭58・5）、16久田泉「『古事記』音注・訓読注の施注原理――「下效此」の場合――」（『国語と国文学』60―9、昭58・9）、17松本光隆「漢書楊雄伝天暦二年点における訓読の方法」（『国語学』128、昭57・3）、18佐藤喜代治「字訓と仮名」（『言語生活』378、昭58・6）、19鶴久「万葉集の正訓文字の訓法――行・往・去をめぐって――」（『香椎潟』29、昭58・10）、20藤村三千代「万葉集二八五一番歌の訓――開の用字をめぐる疑問――」（『帝塚山学院大学日本文学研究』13、昭57・2）、21毛利正守「『物念』の訓読をめぐって」（『万葉』109、昭57・2）、22遠藤嘉基『日本霊異記訓釈攷』、23小泉道「日本霊異記中巻の本文と訓読私案」（『訓点語と訓点資料』67、昭57・5）、24同「日本霊異記の本文と訓読」（『古典学藻』所収）、25松本明美「ウルハシ考」（『叙説』7、昭57・10）、26大坪併治「漢文訓読文におけるナゼニの成立をめぐって」（『国語学』132、昭58・3）、27田島毓堂「法華経為字ベシ訓源流考」（『名古屋大学国語国文学』50、昭57・7）、28三保忠夫・三保サト子『雲州往来享禄本研究と総索引本文・研究篇』（和泉書院、昭57・8）、29宇都宮睦男「時賢本白氏文集の『共通訓』について」（『国語国文』51―11、昭57・9）、30同「時賢本白氏文集の『固有訓』について」（『国語国文』52―5、昭58・5）、31檀原みすず「『舞姫』における漢字の読み方に関する諸問題」（『橿蔭国文学』19、昭57・2）。14は訓読文・類義字一覧・同訓異字一覧などが小林芳規氏の担当で、学会待望の書であったために前期の展望者、西宮一民氏が期間外の本書をはやばやと取り挙げてしまわれたほどである。今後の古事記学は本書を中心に展開するであろう。15は14に対する反論で、同訓異字を一漢字一訓で訓み切れるかと疑問を提出している。文体に癖があるが一読の価値がある。22は著者が長年意欲的に取り組んでこられた『霊異記』研究の集大成で文字に関する論考も収められていることは前述のとおりである。喜寿の祝賀として刊行されたもの。28は「和語表記における漢字の用法」を収めていて有益である。31は漢字の読みの問題が近代の文献にまで下ってきたことを示すもので、このような地道な調査の積み重ねが必要であることを教えてくれる。

振り仮名・振り漢字の問題を論じたものに、32進藤咲子「ふりがなの機能と変遷」（『講座日本語学』6所収）、33山口紀子「『雨月物語』の用字」（『東京女子大学日本文学』60、昭58・9）、34小林雅宏「『西国立志編』におけるふりがなの使いわけ」（『専修国文』31）、35山内潤三「仮名文献における振漢字の諸問題――大谷女子大学蔵本『秋月』翻刻にあたって――」（『大谷女子大国文』13、昭58・2）があった。32は『古事記』から『吉里吉里人』に及ぶ視野の広いものである。

二

表記に関する種々の問題を取り挙げた論考に、36池上禎造「表記の歴史から見た現代語表記法」（『講座日本語学』6所収）、37築島裕「国語史における文字表記論の問題点」（『日本語学』2―5、昭58・5）があった。36では「表記」という語の由来や、文字生活と表記の歴史が〈文字偏在・文字の普及・文字社会〉の三期に分けて説かれ、各期の特質と、研究上の問題点が指摘されていて学ぶことが多

い。また∧総じて言えば、古文献の表記の実態（仮名遣い・送り仮名・漢字の種類用法・段落句読・分かち書き）は最近やっと少しばかり調べ出されたに過ぎない。労多くして、多分功少ない分野であろう∨と展望もなされている。37では仮名づかいが独自の展開をしただけに∧文字表記史の上から、注目に価する課題∨であること、定家仮名づかいについては、その独創性の問題をさらに検討する必要があること、そのほか定家の用字法の問題、文字づかいの事実が定家のどのような研究ないしは作歌の意識に結びつくかの問題など、重要な今後の研究課題が提出されており、最後に∧古典の文学作品の古写本を翻刻する場合、仮名や漢字を、原本のまま改めないで忠実に翻字することの重要性を私は強調したい∨と記されている。同じ趣旨のことを小松英雄氏も後出の93で主張しておられる。

漢字の機能を問題にした研究に、38野村雅昭「漢字の機能の歴史」（『講座日本語学』6所収）、39神尾暢子『王朝国語の表現映像』（新典社、昭57・4）、40森岡健二「明治期における漢字の役割」（『言語生活』378、昭58・6）がある。38は『古事記』と現代の新聞の漢字を比較するという大胆な試みであるが、資料の性格の違いが大きいだけに漢字の機能の差が明確に出ている。39は「漢字映像と概念転移」を収める。40は漢字に、語基を分解表記するものと宛字式表記をするものの二種があることを述べたもので34・69と係わる。

正訓字と万葉仮名の関係を対象にしたものには、41田島光平『語法の論理』（笠間書院、昭57・3）、42小谷博泰「藤原宮木簡の用字および表記について」（『訓点語と訓点資料』69、昭58・8）、43杉村俊男「上代木簡における国語表記のさまざまな方法について（付）「上代木簡に表記された国語語彙の検討」補遺」（『共立女子短期大学（文科）紀要』25、昭57・2）がある。41には「万葉集に於ける『ず』の表記の特色とそれより導かれる種々の問題」「『なり』の表記の意味するもの——万葉集にについて——」などの好論が入っている。42は藤原宮木簡と平城京木簡を比較して文字能力や言語生活に言及していて魅力に富む。

同一文献内の異表記・漢字の選択の問題を取り挙げたものに次の論があった。44戸谷高明「古事記表現論——用字選択の意識——」（『学術研究国語・国文学編』31、昭57・12）、45西宮一民「『古事記』の通用字」（『古典学藻』所収）、46木田章義「古事記そのものが語る古事記の成書過程——「以音注」を手がかりに——」（『万葉』115、昭58・10）、47佐々木民夫「万葉集の『笑（エム）』」（『文芸研究』101、昭57・9）、48藤井茂利「上代日本の補助動詞『賜・給』の表記」（『人文学科論集』17、昭57・3）、49同「正倉院文書に見える『給』『賜』の用法」（『人文学科論集』18、昭58・3）、50丸山隆司「うたと文字——つなぎことば『御隠（ねもころ）』をめぐって——」（『万葉』112、昭58・1）、51鈴木恵「『無』『无』字をめぐって」（『東洋』19—11、昭57・11）、52高橋敬一「今昔物語集における避板法・変字法」（『福岡女子短大紀要』23、昭57・6）。48は古朝鮮における用字との関係を指摘している点で論旨が75と共通するところがある。45や51は用字意識にまで言及されていて注目される。

時代ごと・文献ごとの漢字の性格・種類・量を論じたものに以下の多様な論考があった。53下村武「空海撰『声字実相義』の用字用語に関する一分析」（『計量国語学』13—8、昭58・3）、54浅野敏彦「真福寺本将門記の漢字・漢語についての一考察」（『国語語彙史の研究』3所収、和泉書院、昭57・5）、55楢田良照「院政・鎌倉期の平仮名

文における漢字の用法について」（『佐賀大学教育学部研究論文集』30―1、昭57・7）、56同「定家本『更級日記』における漢字の用法について」（『佐賀大国文』11、昭58・11）、57田中雅和「『草案集』の用字に関する一考察――副詞による検討――」（『鎌倉時代語研究』6、武蔵野書院、昭58・5）、58土井忠生『吉利支丹論攷』（三省堂、昭57・4）、59杉本つとむ『西鶴語彙管見』（ひたく書房、昭57・2）、60山中敦子「西鶴本に関する一考察――その表記の多様性のもつ意味――」（『香椎潟』28、昭58・3）、61矢野準「黄表紙に於ける漢字――黄表紙十一種の使用漢字一覧――」（『文献探究』10、昭57・9）、62山田俊雄『詞林逍遥』（角川書店、昭58・7）、63同「近世の常用漢字について」（『言語生活』378、昭58・6）、64同「近世常用の漢字――雑俳『新木賊』の用字について――」（『成城文芸』105、昭58・12）、65梶原滉太郎「新聞の漢字含有率の変遷――明治・大正・昭和を通じて――」（『研究報告集』3、昭57・3）。58は〈キリシタンの目についたことは、日本語そのものよりはそれを書く文字の面であっ〉たという貴重な指摘や『南詞雑解』の宛字など、文字・表記に関する論考を含む。59は「西鶴の漢字用法とかなづかい〈付記〉表記体系と板元との関連性」が収められていて、用字に関する問題点にも及び、〈漢字の字体（字形）のバリエーションの問題、字音・字訓語（漢語と関連した用字法。当字・当読みをふくむ）の問題、作品と用字との関連、分布状態の問題、漢字の字体の発生的考察の問題、用字の実態と処理の方法の問題、西鶴自筆板下本と用字および他との関連の問題、用字の性格の問題、辞（字）典と西鶴の用字の問題、日本の漢字漢語史上における西鶴作品の用字の問題〉など、有益な提起がなされている。62には「漱石の用字――三馬――」「『節用集』のこと」「漢字・漢語のむつかしさ――『周関』の場合――」「字訓の伝承」などが収められていて、重要な指摘、研究法についての厳しい批判がある。63は主として64の精緻な調査分析を踏まえた立論で、近世の常用漢字の考察には振仮名づき文字連続を視野に入れて行う必要があるという方法論が展開されている。字音・字訓の処理についても、64で〈私は、字音・字訓の表示には、その音、その訓が、独立か、複合かを、必ず示すことを求める習慣を確立したいと考へるのである〉と記されているように、新しい方法が提示されている。65は漢字の研究が明治・大正にまで下りてきたことを示すものであり、今後の成果が期待される。

文章と漢字・熟字との関係を論じたものとしては、66小山登久「変体漢文の文体史」（『講座日本語学』7所収、昭57・8）があったことを挙げるにとどめたい。

1で論じられた漢字の日本的特殊用法を正面にすえた研究に、67三木雅博「『匂』字と『にほふ』――菅原道真と和語の漢字表記――」（『文学史研究』23、昭57・12）、68中島壌治「日本民族の漢字受容に関する一考察――この言葉型民族のすばらしさと戒心すべき点と――」（『国学院雑誌』、昭57・11）がある。67は「匂（にほふ）」という漢字の成立過程を菅原道真の使用を中心に追究したもので堅実な論である。

外来語・外国語の漢字表記を取り挙げた論文に、69松田裕「宛字『基督』考」（『国語学』131、昭57・12）、70上野力「明治初期の外国地名表記」（『常葉学園短期大学紀要』13、昭56・12）、71小林雅宏「明治初期の翻訳書からみた外国地名の表記」（『文研論集』8、昭57・11）があり、他に、日本で覆刻もされた漢訳書『地理全志』に「基督」「方舟」が記されていることを報告したものに松井利彦「近代日本漢語と漢訳書の漢語」（『広島女子大学文学部紀要』18、昭58・

3）がある。69は資料を博索しての好論で強い刺激を受ける。この分野は最近になって着手されたものであるが、表記以外の大きな問題とも係わることが予想され、今後の展開が期待される。

なお、置き場所が適切でないかもしれないが、漢字と和製漢語との関係を論じたものをここで挙げておきたい。〈日本的漢字遣〉による造語を論述したものに、72高松政雄「和用法の字音語――色葉字類抄畳字部より――」（『訓点語と訓点資料』69、昭58・8）、73同「準漢語――字類抄畳字部中の「――詞」註記語より――」（同上）があり、72・73で触れられている〈字序〉を論じたものに、「近世の漢語についての一考察」を収める74佐藤亨『近世語彙の研究』（桜楓社、昭58・6）があった。高松氏は他に「不・無」の二重表記に係わる「慣用音成立の一の場合――「不 ブ――」（『国語国文』51―11、昭57・9）の好論がある。

三

仮名の研究に移ると、万葉仮名を対象とした論考に以下のものがあった。75姜斗興『吏読と万葉仮名の研究』（和泉書院、昭57・10）、76井手至「万葉集編纂資料の用字」（『武蔵野文学』30、昭57・11）、77工藤博子「万葉集巻十四に於ける平安時代的性格――用字と上代特殊仮名遣をめぐって――」（『語文研究』52・53、昭57・6）、78安部美絵「万葉集巻九論――用字法から見た構造と成立について――」（『香椎潟』29、昭58・10）、79寺島利尚「万葉仮名の義字性について」（『東洋』20―7、昭58・7）、80西崎亨「日本紀竟宴和歌の用字用語について」（『水門』13、昭57・7）、81浅見徹「和歌の真名表記」（『古典学藻』所収）。75は万葉仮名の成立を論じた労作。77・78は特徴的な用字から『万葉集』の、標題の巻の成立・構造を論じたもので、ともに手堅い論証である。

仮名の機能を論述したものに、万葉仮名については、82小谷博泰「宣命の文章と表記――翻訳文ならびに漢字仮名交じり文として――」（『奈良教育大学国文研究と教育』6、昭58・3）があり、平仮名については、83遠藤邦基「平仮名の機能の歴史」（『講座日本語学』6所収）、84鈴木日出男「仮名ことばの文学」（『日本文学』31―3、昭57・3）があった。また、片仮名に関しては、85岩淵匡「片仮名の機能の歴史」（『講座日本語学』6所収）、86寺沢一枝「『浮雲』の片仮名表記」（『国文瀬名』4、昭58・6）があった。83・85ではともに行き届いた概観がなされている。

角筆で書かれているという点で以上の仮名と別扱いにするならば、角筆文字に関しては、87太田次男・小林芳規『神田本白氏文集の研究』（勉誠社、昭57・2）、88小林芳規「角筆文献研究の課題」（『国語学』128、昭57・3）、89同「佐賀県小城町岩蔵寺蔵大般若経に書入れられた鎌倉時代の角筆文字等について」（『鎌倉時代語研究』5、武蔵野書院、昭57・5）、90『古刊本『本願寺聖人親鸞伝絵』（御伝鈔）の研究』（善慶寺、昭58・9）の研究があった。90は小林芳規氏の「善慶寺蔵古刊本『本願寺聖人親鸞伝絵』の角筆文字について」が入っており、87には同氏の「角筆点に基く神田本白氏文集の訓点の考察」が収められている。88は角筆文字の国語史的価値が初めて総合的に論ぜられ、注目されるもので、特に文字については、角筆文献のなかに平安中期の女手が見られること、女手が片仮名と対立する別の文字体系として意識されていたことを示すものがあるなど、貴重な論述が多くなされている。

文字づかいの研究は各時代で深化しており、91犬飼隆「万葉仮名の文字法の歴史」（『講座日本語学』6所収）、92森田敦子「仮名文の表記原理――『古今和歌集』（伊達本）について――」（『山口女子大国文』4、昭57・6）、93小松英雄『徒然草抜書解釈の原点』（三省堂、昭58・6）、94坂口至「虎明の表記意識」（『文献探究』11、昭58・3）、95野口義広「浄瑠璃丸本における表記をめぐって――平仮名字体について――」（『文献探究』12、昭58・7）があった。93は「うしのつの文字」「土偏に候ふ」「蟷といふ貝」「いみじき秀句」などの論考が収められており、『徒然草』のなかに様々の用字原理が活用されていることを教えられる。また、漢字と仮名との間には互換性の限界があるという、緻密な論証に基づく主張は読む者を納得させずにはおかない。知的快感を覚える魅力にあふれる好著である。

仮名づかいの研究はまことに盛んであった。96大野晋『仮名遣と上代語』（岩波書店、昭57・2）、97竹村信治「『木芙蓉』（源氏小鏡・広島大学蔵本）の本文について――定家仮名遣と定家仮託とのかかわりなど――」（『古代中世国文学』3、昭57・8）、98市原愿「伊勢物語朱雀院塗籠本表記の基盤」（『文学・語学』96、昭58・1）、99泉基博「『十訓抄』の仮名遣について」（『武庫川国文』21、昭58・3）、100崎村弘文「東京大学蔵『宗祇仮名遣』について」（『文献探究』11、昭58・3）、101同「古辞書と仮名遣い――近世の節用集の場合――」（『文献探究』12、昭58・7）、102柴山俊彦「『おあん物語』の仮名遣――二種の写本を中心に――」（『学術研究　国語・国文学編』31、昭57・12）、103前田富祺「近世にはどんな仮名遣いが行われていたか」（『国文学』27―16、昭57・12）、104同「『倭字古今通例全書』の時代的意義」（『国語学史論叢』所収）、105細川英雄「国語資料としての広本系『醒睡笑』の性格について――和語における四つ仮名表記を中心に――」（『信州大学教育学部紀要』46、昭57・3）、106同「南葵文庫蔵『醒睡笑』の四つ仮名表記について」（『信州大学教育学部紀要』48、昭58・3）、107沼本克明『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』（武蔵野書院、昭57・3）、108鈴木真喜男「『字音仮字用格早引』と『かなづかひ早引』」（『東京学芸大学紀要Ⅱ（人文）』34、昭58・2）。96は「仮名遣の起源についての研究」「仮名遣の起源についての研究」資料が収められている。現在では定説となっているといってよい大野氏の定家仮名づかいについての論は、論理的に構築されていて、〈新たに日本語学、ことにその古代語学に踏み込もうとする人々の入門書〉の巻頭にふさわしい。104では橘成員と契沖の仮名づかい観の相違と、それから生ずる事象を美事に突いている。なお107には重厚な考証に基づく「字音仮名遣の諸問題」が入っている。

文献ごとの表記の特徴の究明、体系の記述をめざしたものに、109宇都宮睦男「天理図書館蔵正応二年鈔本白氏文集巻第四の訓点」（『訓点語と訓点資料』67・69、昭57・5、昭58・8）、110田島清司「『法華百座聞書抄』の表記法(2)」（『九州大谷研究紀要』9、昭58・3）、111山内洋一郎「金沢文庫蔵仏教説話集の表記体系」（『鎌倉時代語研究』5、昭57・5）、112山本早苗「尾州家本横笛巻における表記上・表現上の特徴――大島本と比較して――」（『解釈』28―11、昭57・11）、113坂本清恵「『未刊国文古註釈大系』本『古今秘注抄』の問題点――附書誌および使用文字について――」（『国語学研究と資料』6、昭57・7）、114安部美絵「古文書による国語史研究序説――『豊太閤真蹟集』について――」（『文献探究』12、昭58・7）があり、着実に調査が進められている。為家本『土左日記』が発見されたことでもあり、この種の報告は増すであろう

が、111のように体系を求める姿勢が望まれる。

キリシタンのローマ字表記を論述したものに、115福島邦道『続キリシタン資料と国語研究』（笠間書院、昭58・7）、116大塚光信「開合音――キリシタン版の表記をめぐって――」（『文学』50―1、昭57・1）、117近藤政美「キリシタン資料における語頭のH表記の語について――ロドリゲス著『日本大文典』の記述を中心にして――」（『金田一春彦博士古稀記念論文集㈠』所収、昭58・12）があった。115にはバレト写本の種々の表記を考察した「特異な表記」や、「長音と長音符」が収められている。116には115の「長音と長音符」に対する反論が見られ〈キリシタン・ローマ字文献の開合表記は、音声事実の反映において、国内文献より上でもなければ下でもない〉とされる。浜田敦氏のいわれる〈規範性〉（『続朝鮮資料による日本語研究』（臨川書店、昭58・8）の質が係わる問題である。

辞書・字書、文字生活に関する論文には、118貞苅伊徳「『新撰字鏡』〈臨時雑要字〉と『漢語抄』」（『国語と国文学』60―1、昭58・1）、119安田章『中世辞書論考』（清文堂、昭58・9）、120今西浩子「室町時代の通俗語と辞書」（『国語語彙史の研究』4所収、和泉書院、昭58・5）、121上野力「江戸川柳にみる文字生活」（『常葉学園短大紀要』14、昭57・12）があった。118は上代の〈日本語を書き記すための用字字書〉を推論したもの。119では〈節用集を「よみから漢字を索める」書く為の辞書とすることにも、当然何等かの註釈が必要〉であり、〈やはり韻事の場における、書く為の辞書という要素を加味しなければならないのではないか〉と説かれる。120では『運歩色葉集』『節用集』（文明本・易林本など）に当時の通俗語がかなり反映していると指摘されるが、〈これはあくまで同語異字の問題を抜きにしての話であって、文字を問題にすれば、おのずから結果も変ってくる〉とされる。古本節用集における文字の特殊性についていわれたものと読める。なお、節用集の文字については、饅頭屋本・天正十八年本と易林本とで〈文字における中世と近世とを分かつ〉と11で述べられており、また、近世・明治の節用集の文字と日常使用漢字との関係が63で論じられ、新しい研究領域が示されている。このほか、近世の節用集については、節用集の果たした文明史的機能は〈日本文明を構成していたふたつの空間、漢字による公的コミュニケーションの世界と、やまとことばや仮名まじり文によって支えられた私的な世界とを繋ぎとめることにあった〉と論ずる横山俊夫「日本人必携の辞書であった節用集から現代へのメッセージ」（『中央公論』、昭59・2）があった。

国字問題に関するものには、122井之口有一『明治以後の漢字政策』（日本学術振興会、昭57・2）、123『国語改革を批判する』（『日本語の世界』16、中央公論社、昭58・5）、124笠井美穂「国語教科書における『イル』の表記の変遷」（『国文鶴見』18、昭58・12）があった。

補助符号に関する論考には、125宇野義方「句読法の歴史」（『講座日本語学』6所収）、126築島裕「仮名声点の起源と発達」（『金田一春彦博士古稀記念論文集㈠』所収）、127遠藤邦基「『古今訓点抄』の声点――その機能について――」（『叙説』7、昭57・10）、128秋永一枝「天理本『散木集注』声点」（『金田一春彦博士古稀記念論文集㈠』所収）、129春日和男「撥音の表記とその限界」（『訓点語と訓点資料』68、昭57・5）、130沼本克明『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』、131出雲朝子『玉塵抄』を中心とした室町時代語の研究』（桜楓社、昭57・10）、132坂梨隆三「浄瑠璃本の半濁音符」（『人文科学科紀要』74、昭57・

3）などがあった。130には「濁点の発生に就て」「漢字音に於る促音の表示法」の手堅い論考が収められており、131は精力的に進められてきた清濁の書き分けについての詳細な論考が入っている。

最後に、春日政治氏の名著『仮名発達史序説』『片仮名の研究』や未刊の『国語文体発達史序説』などが『春日政治著作集』（1・2、勉誠社、昭57・11、昭58・1）として刊行されたことを付け加える。この分野の研究を稗益すること大である。

以上のように見てくると、36で〈最近やっと少しばかり調べ出された過ぎないV〉といわれた古文献の表記の実態調査を含む文字・表記の研究は着実に増加し、深化しつつあるといえよう。

もはや、編集部から与えられた紙幅を二割がた超過した。二百数十点の論文・著書を閲読した結果、右のような形の展望となった。「表記」ということばの意味するところは広く、「文字」「漢字」は「ことば」「漢語」といいかえても差支えないようにも使われる。基準を立てにくかったが、他の分野で対象にされるであろうと察せられるものは、できるだけ省くことにした。索引や翻刻の解説中で触れられる記述も除いた。それでも百点を超えた。国語史の研究が文献を用いてのものが中心であってみれば、各分野の研究において文字・表記に触れられることが多いのは当然である。また文字・表記が対象にすえられることが多いのも当然であるといえよう。右で挙げた論文で、標題に「文字・表記」などの文字を掲げたものは、ざっと数えても「表記(法)」26点、「漢字(国字・宛字)」16点、「用字・変字法」14点、「仮名づかい」9点、「文字」7点、「仮名」7点、「振仮名・振漢字」3点、「字体・字形」2点で、合計すると89点にのぼる。訓読・訓点語に関するものを除けば、ほとんどの論文で「文字・表記」に類することばが標題に使用されているということになる。この研究分野の特殊性を示しているといえよう。

この展望をするにあたっては、国立国語研究所文献調査室、特に田原圭子氏にたいへんお世話になった。また、西田直敏氏・前田富祺氏執筆の「学会時評」（『国文学』掲載）、犬飼隆氏・藥科勝之氏による『文学・語学』の「展望」を参考にさせていただいた。お礼を申し上げる。

追記

今期の一大特色である節用集の用字研究に、湯浅茂雄「節用集の語彙」（『講座日本語学』5、昭57・12）があることに後で気づいたので付け加える。

——広島女子大学教授——